

【証言と資料】

飛舞人生——台湾現代舞踊家・李彩娥氏インタビュー

星野幸代 楊韜

はじめに

台湾の人間国宝である舞踊家・李彩娥氏（1926（大正15）台湾高雄ー）は日本の舞踊家・石井漠（1886-1962）から創作舞踊を学び、戦時中に台湾に戻り、高雄を拠点に創作舞踊を普及させた功労者である。現在もお舞踊教育に従事するとともに、現役の舞踊家としてステージに立つ。またその子、孫の世代もダンサー、舞踊指導者として台湾及び海外で活躍している（本稿「附録1 李彩娥をめぐる現役の舞踊家たち」参照）。

本インタビューは次のような経緯で実現した。筆者たちは2012年度より戦時の芸術活動について共同研究を行っているが、その一環として石井漠の大陸舞踊公演を調査しているうち、以下の記述に相次いで行き当たった。

石井漠舞踊団（石井漠、石井カンナ、和井内恭子、李彩娥等十一名。主なる曲目、海行かば、追憶、黒坊人形の踊り、前奏曲、西風の見た者、荒城の月、仮面、あきらめ、東洋風舞曲、三稜鏡、蛇性、田舎娘、迦摩、日光、地理の書）十三日哈爾濱モデルン、十四日、牡丹江有楽座、十六、十七日、奉天銀映劇場、十八日、本溪湖公会堂、十九日、撫順公会堂、二十二、二十三日、新京厚生会館、二十四、二十五日、大連協和会館。（『満州藝文通信』1943年7月¹ [下線は筆者、以下同様]

都（東京）新聞主催舞踊コンクール

十四年に第一回、十五年に第二回、第三回は十六年の三月五日、日比谷公会堂で催され、児童部の邦舞、洋舞、一般の部の邦舞、洋舞の四部門



李彩娥舞踊芸術中心スタジオにて。2013.7.10
左から洪若涵氏（孫）、李彩娥氏、洪再利氏（三男）。

に分かれて行われ、一般の部の洋舞では台湾人の石井漠舞踊学校の三年生、十五歳^{ママ}の李彩娥^{ママ}が一位に、この人は今でも台湾で洋舞を教えている。(村松道弥『私の舞踊史 上巻』)ⁱⁱ

続いて、李彩娥氏が現在もお現役ダンサーとして台湾の高雄にスタジオを持ち、2012年にも秋田の石井漠没後50年記念公演に出演したことを知ったⁱⁱⁱ。高雄市政府文化局のHPから李彩娥舞踊芸術中心(Lee Tsia-Oe Ballet School)のメールアドレスと住所が分かったものの、日本からでは連絡が繋がらなかったため、台湾国立虎尾科技大学助理解教授である河尻和也氏、同大学講師である張蓮氏の手を煩わせて台湾で直接連絡をとってもらい、インタビューの実現に至った。河尻氏、張蓮氏にはインタビュー当日も李彩娥舞踊芸術中心への案内にはじまり、全日お付き合い願った。

李彩娥氏は、日本植民時代の台湾で教育を受け、日本で石井漠に学び、石井漠舞踊団の一員として大陸、南洋を軍事慰問に回った。戦時中に台湾に戻り、戦後は台湾で創作舞踊を民族舞踊と融合させ、舞踊家としてまた舞踊教育家として多くの後継者を育て、戦後台湾の舞踊界に貢献し続けている。それとともに、舞踊を通じて日台交流を促進してきた。李彩娥氏のインタビューは舞踊を中心とした一世紀に跨る日台交流を考える上で意義深い、貴重な証言であると考えられる。

2013年7月10日、まず李彩娥舞踊芸術中心(高雄市前金区自強一路65巷10号)のスタジオを見学した後、隣接する李彩娥氏の居室にて、資料閲覧をさしはさみつつ2時間半インタビューを行った。李彩娥氏の三男である洪再利氏(原高雄市政府都市發展局副局長)と、李彩娥氏の孫娘である洪若涵氏(舞踊家、舞踊教師)が立ち会い、資料提



インタビュー中の李彩娥氏

示補助に当たった。使用言語は主として日本語であり、李彩娥氏が折々洪再利氏と洪若涵氏に内容を台湾語または北京語で確認し、洪再利氏が補足説明をする際には北京語で、台湾語は必要に応じて張蓮氏が我々に通訳した。

インタビュー内容は時系列順に並べなおし、また紙幅などの都合により割愛した部分もあることをお断りしておきたい。なお、参考資料として李彩娥氏の親族である後継舞踊家たちの一覧と、李彩娥氏略年表を附す。

インタビュー

* 話者の表示がないものは全て李彩娥氏の語り。イ

インタビュアーはダッシュで表した。

1 台湾での少女時代

幼児期のピアノ・レッスン

ひいおじいちゃんの代から貸地業、それで余裕があったんですよ、私の時代にはね、ですから、おじいちゃんには孫たちにはかならず好い教育をするようにと、私の父に言い渡していたそうです。父は東京の大震災の時、京都に兄弟で逃れました。大震災でしょ、列車は満員で、汽車の内ではなく上に乗って京都に逃げたんですって。それで、同志社に入りました。まず教育的に、芸術的なものということで、それでピアノを習わせてもらっていたんです。

小学校での初舞台：「花嫁人形」

私は田舎で育ちました。屏東九如学校へ〔高雄市から西へ約 25 キロ〕うちの叔母が私を自転車に乗せて学校へ通いました。九如学校より屏東の学校へ転校、一年生の時合唱団に入れられました。私六人兄弟の長女だけどね、お話べた、すごく縮こまっていた時代です。合唱って口を開くけどね、音にならないわけ。合唱団はピアノの後ろでしょ、そしたらね、前の子が一生懸命踊っているのを私が真似たそうです。そしたら先生が、あれ、あの子、後ろにいるあの合唱団の李彩娥、前に出て来いと言われて、そこから踊りが始まりました。

〔「花嫁人形」を踊る〕花嫁衣裳なんてすごく高いおねだんです。私は何も知らなかったけれど親たちは、大丈夫大丈夫、あれくらいなんでもないって、余裕がなければちよつと作ってやれませんか。舞台は屏東劇場というところで、ピアノの伴奏で踊りました。それが最初、生まれてはじめての舞踊姿。

ステージの時のピアノの先生は、台湾の男の先生、踊りの指導は日本の女の先生、なぜならば、あの頃日本時代で、学校の先生方、殆ど舞踊が出来るんです。校長先生がすごく芸術を愛してまして、〔小学校教員たちに向かって〕あなたね、日本へ帰って勉強していらっしゃいって言われまして、何か月かお稽古しまして、それで帰ってきて私たち生徒たちに学芸会なんかで指導していたんです。



七歳の初舞台「花嫁人形」。李彩娥氏提供。

石井漠門下生となるまで

小学四年生の時に台南に移りました。やっぱり教育のためにね、おじいちゃんに、南部の方へ引越ししろと言われて引越しました。松岡先生という先生が、学芸会やらマ스ゲームやら、他の学校も指導しなきゃいけません、私はちょこちょこ助教として——本当の助教じゃないですよ、ただもう「はい」と、あのころは「けいちゃん」と呼ばれて——一緒にあちらこちらの小学校へね、もう嬉しいたらございません。勉強しないで踊ればいいから、マ스ゲーム、そして「奴さん」とか、「越後獅子」とか、日本の歴史的なものをね、踊らされました。ただ踊りたさに嬉しかったんですよ。六年生になりましたときには、もうだいふ踊りましたね。今で見る日本舞踊ですか、殆ど踊りましたよ。米田〔亀太郎〕校長先生が、日本の歴史的なものをみんな教えて下さいました。それで、米田校長先生がうちの父と母に、この子は惜しい、日本に送りなさいとね、学校じゃもったいない、基礎的にやらないとだめ、この子に天分があるというわけで、それで家に余裕がございましたから、家族ね、子供たち六人に親たちで八人、船に乗りました。三泊四日ゆらりゆらりと、何も知りません、あの頃親に付いて、どこに行くのか連れて行かれるのかも分からないわけよね。それで東京の下落合で、小学校六年を終えました。そこで、ほら、縄跳びがございましょ。みんなして休み時間に、高くして、跳べないわけね。李さんおいで、とパツと跳んで。そういう思い出があります。またほら、跳び箱で、李さんおいでって、もう跳ぶことは大好きだから、パツと。

うちの父は京都出身及び東京出身だけど、舞踊のことは一向に知りませんね、それで文化人蔡培火^{IV}先生に、石井漠先生を紹介されました。入ると同時にね、水を得た魚のように、嬉しくて嬉しくて、しかし言葉にならないわけ、私お話べただから。あのころなんにもしゃべれないで、踊りました。学校ですから、朝は学科ね、午後から舞踊に入ります。あのころはね、創作舞踊です。モダンバレエじゃございません。自分もほら、日本語が余りできないでしょ。今でこそね、お勉強しつつ話しますけど、あのころ勉強どころじゃございません、とにかく踊り踊り踊りまくりました。

2 戦時日本：石井漠門下生として

都新聞舞踊コンクールで第一位

家は東中野だったんですよ、そこで一時間半ばかり電車に乗って通っておりました。その間、とにかく踊り踊り踊りで無我夢中でした。父親が病気で台湾に帰りました。私は、寄宿生になりました。自由が丘〔東京都目黒区自由が丘の石井漠舞踊研究所〕。

舞踊コンクールのお話に入りましょ。ある日、漠先生が私に「李^り子ちゃん、李子ちゃん〔石井漠先生にそう呼ばれていた〕」っていうんです。「今度ね、舞踊コンクールがあるんですよ、李子ちゃんすごくお上手だから、太平洋行進曲^{補注1}をね、教えてあげる」「は

い」って。前後を知りません。ただ、皆様に教えてないものを私に教えて下さったわけ。太平洋行進曲という、だからすごくプライドがあったんですよね。一生懸命お稽古しました。予選の翌日、先生方が新聞を見て——「李彩娥」じゃございません、ナンバーです。仮に55番としましょう——「55番、出ているよ」「入った入った」私は何が入ったのか分からない。「李子おいで、お稽古お稽古。」それでまたお稽古しました。松坂屋、副選。また翌日、「あ、55番、入ってる。」みな嬉しそうに言うの。私だけぼかーんと、なんだか、またお稽古できる、それだけです。先生と私、二人だけでした。とにかく嬉しかったのね。で今度決戦、日比谷公会堂。その日、漠先生が「李子ちゃん、あなた台湾から帰ってきたとき、チャイナ服持って帰って来たね、それからハノイであなたはハイヒールを買いましたね」「はい」「それ持って行きましょうね。」何で？って言えませんが、とにかく何でも「はい」「はい」。チャイナ服、あたしの服じゃないの、うちの叔母の服なの、ハイヒール、こんな高いの、ハノイで買いました。で、持っていきました。踊りました。楽屋に戻りますと、先輩たちが一生懸命お化粧して下さいました。「李子ちゃん、チャイナドレスは?」「はい、こちら」。もうお人形みたいに、「お靴は?」「はい」って。そして今度は「はい、舞台に出ますよ」「はい」。踊り終わりました。良かったことにいつも歩き方を練習していますから、舞台できれいに歩きました。ずらっと日比谷公会堂に並びました。問題はこれからです。10、9、8、7、6、5、4、3、「2番。」なぜ私の番が来ないのかしらと。「1番、台湾の李彩娥」。え、私よね。他の方はバツバツと出ましたけれど、私はぼかんとして、出ていきました。それで、賞状を頂きました。後でわかったんですけど、[客席に]台湾の大学生がいっぱいたんです。わーっと、みんなして「台湾の李彩娥」って喜んで下さったそうです。もう拍手いっぱい。その日一杯お土産頂きました。「李子、持たないでいいよ、はいこっち持つ。いいよいいよ」ってみんなしてね、何も持たせないで。漠先生の坊ちゃん、石井歓 [1921-2009、作曲家] 先生も、「ほく持つよ」「勿体ない、勿体ない」「いいよ李子、今日はね」って。みんなして大喜び、初めての舞踊コンクールで、「台湾の李彩娥」、それだからね、石井漠先生も鼻が高かったわけ。



「太平洋行進曲」で舞踊コンクール一位に。
李彩娥氏提供。

でそのあと、日本中を色んなところへ、公演に付いて行きますとね、必ず、ポスターに「台湾の李彩娥」、韓国や、どこへ行っても。嬉しかったですね。

コンクールで踊った演目

一回目が16歳で「太平洋行進曲」でしょ。先生はやっぱり、認めてくれていたんでしょうね、二年目はね、「アニトラ」。あのころはアニトラって、英語の名前使えません、「東洋風舞曲」です。実際は「アニトラ」です。その時は2位に入りました。そして三年目は一位「潮鳴り」は大分受けました。石井歆先生の作曲、石井カナ先生の振り付け、私たち5、6人群舞で踊りました。名前はカナ先生の名前になっております。そして次の年ですか、「海行かば」また二位とりました。四回入っているわけ、名前は三回。

大陸公演

〔石井漠門下で大陸慰問一行の一人和井内恭子^v氏について〕秋田にほら、十和田湖がございましょう。あそこの、湖のお嬢様。先輩。秋田美人です。

とにかく大陸ですと、ハルピン、都市ですよ、新京、ちょっと田舎に行きますと張家口、とにかくいろんなところに参りました。あのころ人力車での宣伝でした。〔一台に一人ずつ乗り、連なって〕十人でしょ、私がね、「先生、人力車、前に乗せて」「どうして、前は先輩でしょう」「だって」って言葉にならないの、怖い、十台目だとね。(笑)。

——中国大陆での公演、団体で、たくさんの方が一緒に移動されたと思いますけど、舞台装置はどのように運んだのですか。

大きい街は劇場がございまして、ハルピンとか新京とかそういう大きいところは、ちゃんとした機材とか入っているんです。ちょっと田舎に入ると、兵隊たちがステージをこしらえます。これまた格別で、山へ行くと、お花いっぱい咲いているの。それをちゃんとね、花かごにしたり花束にして贈って下さいました。ステージ作って下さって、日比谷公会堂じゃないけど、両側に花束いっぱい。

石井漠舞踊団は、ただ踊るばかりじゃございません。わたくし照明係にもなったり、ステージを、こしらえて、みな土方になる、もう段ボール、板、ぱーっと開く、それからライト、あなたの番は映してあげる、私の番はあなた、お互いにということをやっておりました。

ポスターは、「台湾の李彩娥」、仮にあなたが私の先輩だとするでしょ、普通ならば、先輩が前、しかしいつも私の名前、やっぱり宣伝になる、漠先生の考えでは。本当にありがたかったです。

——移動中は、苦労されたんですね。

もちろん。下働きですよ。これがなくちゃ上手には踊れません。怠け者もいますよ。先生が見ていないと。そこで、認められたわけね私。うちの漠先生の目が痛いのはおよ

そそのライトの御蔭^{vi}。先生ご自身も片づけをしました。

——照明係を？

もちろんもちろん。みんな役割があるの。その後が大変。我々女もね。床はあるけどその上に敷くシートね、あれはもう東京から持っていくんです。それが大変なの。なぜならば、昔は赤帽っていましたよね。我々いっぱい荷物があるんですよ、絶対赤帽は使いません。お金は絶対に無駄に使わせない。そこで鍛えられました。踊ったあとみな汗だくだくでしょ、苦しいんですよ、それでも。だって殿方少ないんです、女子ばかりでしょ、やりました。

外国旅行の時、漠先生がね、「李子、お前はね、南部の育ちだから、先生の乗馬のおズボン、あげる」ってご自分のを下すったんですよ。それで「寒いから気をつけるんだよ」って。「充分、大丈夫」なんて威張っちゃって。さて、ハルピンに入った。まだ舞台の時間が来ないので、ハルピンの街の見物、ショッピングね。というよりも街を歩くだけ、お金ないから。そしたら或る子がね、泣き出したの。李子ちゃんがね。(笑)寒くて。ああ先生の言うとおりであった。ジャンパーも下すったんですよ。でも初めての雪でしょ。街の真ん中で大泣き。お部屋に入ればね、スチームがあるけど。

ハノイ慰問

東京から汽車で、神戸じゃなくて、あのころ軍事港がございました。いまばつと名が出てこない、ういな？ [宇品港と思われる] …そこから船で高雄。神戸からだ、私たちが台南に帰る便ですよ、基隆、軍事の港だから。高雄の港からは、ハイフォンで船が止まって、そこからハノイに車で入るわけ。ハノイね、あのころはフランスの統治でしょ。大きな湖がきれいでした。ステージがねすごく、17、18歳のとき映画で見たパリのオペラ座、そのままね、そこで踊りました。だからホテルも、初めてジュースも、おいしかった。外国の飲み物よ、あのころジュースと言わない。とにかく田舎っぺで、東京も、鎖国だから。ほんとでした。ホテルもすばらしい。ベッドも何もかも。私たちもいい気になってよろこびました。

ハノイの道中、父の見舞と別れ

うちの父が、台南で入院しておりました。漠先生がまだ船が出る時間があるから、台南の病院へね、お父さんを看ておいでって言われました。嬉しくて嬉しくて、もう何年間か、会っていませんから。行きましたらベッドでしょ。うちの父は、ほらちょうど太平洋行進曲、1位とりましたから、それを踊ってね、いっぱい [人] 病室に集めて下すって、踊りました。もういい気になって、父のための踊りだから。いろんなハンガリー舞曲とか、音もなしに。父の目的は院長とか、皆に見せたかったわけ。そしてまたさよならして、高雄からハノイに行ったわけ。そして踊って二か月くらいかしら、その帰りにね、香港に寄るはずだったけれども、船の関係で、ただ甲板でみなくやしくやしいっ

て、香港の夜景を眺めました。先ほどの、父が嬉しそうに見ていた、それが浮かんできたので、しかし夢で、ほらもうここが終わればお土産持って台湾に帰れるんだって、そういう気持ちで、トランクにいっぱいお土産買ってあるわけ。その夜、[夢で] うちの父が血を吐いてばつと私に倒れてきました。そのことをね、誰にも言わなかった。それが最期だったんです。その夢が。しかしうちの父亡くなったけれども、手紙がそのあとも東京に届いてました。なぜならば、私の父の病氣中、叔父[同志社大学出身]が代筆をしていました。私には隠してました。

施政記念日の会で踊る～父の死

^{補注2} 父李彩娥は来日して六年経ち、ホームシックになって台湾へ帰ろうと決心したところ、日本の台湾占領記念日が近づいた。船の切符も買ってあったが、当時の台湾総督長谷川清が台湾人の李彩娥に東京、大阪の施政記念式典で踊ってほしいと指名した。李彩娥は帰りたくてたまらず、その要請を何とか断りたかったが、石井漠先生に大局を重んじなければと諭され、承諾した。李彩娥は意気消沈して出演したのだが、人間万事塞翁が馬、李彩娥はこの出演のおかげで難を免れたのだった[後述]。

昭和18(1943)年末、石井漠先生はこの優秀な弟子を手元にとどめたかったが、李彩娥は故郷に帰りたい一心だった。李彩娥は当時の状況を次のように述べる。「私は自分が本当に恩知らずだったと思います、石井漠先生があんなに努力して私を育てて下さったのに、全く未練もなく先生のもとを去ったのでした。まさかこの別れが石井漠先生との永遠の別れになるとは思いもよりませんでした。」

李彩娥は回想する。「高千穂丸が遭難した当時、私はその事件を知りもせず、後で台湾に帰る船上で、彭佳嶼付近まで航行したところで、船員が急におにぎりとお花を取り出して、乗客たちにそのわけを説明し、一緒に哀悼するように言ったので、ようやく自分がどんなに幸運であったか知ったのです。高千穂丸では大勢の台湾の商人、留学生が亡くなり、また台湾に派遣された日本人警察官、公務員などがいたそうです、本当に悲しいことです。」

李彩娥が無事に基隆に降り立ち、汽車で南下し、自宅の玄関に表れたその瞬間、家族は仰天した。当時は通信手段が未発達で、李彩娥もステージの準備に紛れて家族に予定の変更を知らせていなかったのだ。式典のため「高千穂丸」の切符を次の便と換えて助かったので、長谷川清総督と石井漠先生は李彩娥の命の恩人だと、李彩娥の母は喜びのあまり泣いて天に感謝した。

みんなが、私がもう死んだかと思って。私が乗るべき高千穂丸^{vi}はやられたんですよ。音沙汰なくて、それで生きて帰って来たもんだから、みんな喜んで。喜ぶ間もなく電報が入ってきて、アニトラのコンクールの準備だって。だから泣く時間もなくて、また次の

便で。もう本当にね、泣くひまもなかったです。

3 戦後台湾での活躍

補注³ 心の支え

父母の指示、恩師の育成、夫の励まし、家庭の後ろ盾、門下生の上達、こうしたものが、挫折や障害に突き当たってもあきらめないよう私を駆り立て、段々に精進し向上し、怒らずくじけないように励ましてくれました。私は、舞踊の領域でささやかな貢献をし続け、舞踊芸術を各人の心の中に芽生えさせ、さらにこの念願を抱いてまいります。

身体的苦痛

舞台ではたおやかに踊っておりますけれども、私が外科の大手術を五回も—アキレス腱断絶縫合手術、良性乳腺腫瘍、肋骨骨折、良性子宮筋腫、甲状腺腫の切除手術—受けていることを、ひとさまはご存じないでしょう。

歴史の鞭撻

花一輪、草一本にもみな命の尊厳がございます、それこそ生活の芸術というものです。私は芸術を生活化し、一切適切日常生活に溶け込ませたのが、舞踊の最高の境地だと深く信じております—「人生舞踊、舞踊人生」です。「美」はどこでも手に入り、「美」はいつでも求められます。「美」は禅の境地のようなものですから、いつでも悟りを開いて自ら任じればよいのです。なぜならば、「美の存在するところは、常に人に心安らかな感覚をもたらす」からです。

1953年～民族舞踊奨励政策。南部の指導者に李彩娥氏が選ばれる

あこのころ台北＝蔡瑞月ⁱⁱⁱ（1921-2005）、台中＝辜雅琴（1929-）、高雄＝李彩娥。いつも台北で会があると、私たち三人で踊っておりました。別々の踊りです。

——蔡瑞月氏は初め石井漠門下生でしたが、一緒にレッスンを受けていた時代は？

ありますよ。しかし彼女は私の先輩のところに移りました。石井みどり^{ix}先生です。

〔洪再利氏が資料を示す〕これね、こういうふうには、中華民族舞踊委員会があつて、1953年には、中華民国舞踊学会、ここで私60年間の功労証書をいただきました。

——教育活動に対して贈られたということですね。

そう。休まずね、広めているわけ。だからね、やっぱり、張り合いがある。政府が応援してくれているから、安心して教育の道を歩いてまいりました。

1954年、台北市政府教育局主催の全国ベテラン舞踊家模範公演で「昭君出塞」を踊る

〔その頃屏東では既にダンス・スタジオを開いていた〕あこのころ、大人の学生もいれば、ちいちゃい子もおりました。そして李彩娥先生が台北の方で踊る、曲に困っているということを知ったわけ、生徒たちがね。そこで、屏東劇場の娘さん——ママが日本の方——その子が、「先生、王昭君」って。あ、それはいいアイデアだ、って。図書館に

行って本を見たり、親戚の方が、お琴、琵琶、持ってきて、歴史の本〔中国語の〕を読んできかせてくれて、レコードを家から持ってきてくれたわけね。はてな、どうして振付ようか。創作でいこう。曲を聴いて、悲しい物語、自分の故郷から離れるのを表そう。それで振付ました。

洪再利氏：〔北京語で〕母が日本から帰った後、台湾の憲兵がうちに来て、「おい、お前日本人だろう、まだ引き揚げないのか」って言ったんですよ。私が小学生のころ、母は北京語も台湾語も話せませんでした。日本語だけです。うちで私たちは自分たちで本を読んでいました。家では日本語ばかりでした。父も、祖父も、みな日本語を話していたのです。みな日本の大学を出ていましたから。叔父さんも、叔母さんも、私の母の実弟も。

母の舞踊創作は歴史です。花木蘭とか中国の歴史を含む、民族的なテーマです。屏東の原住民、客家の歴史、音楽、背景などを調べて創作しています。

李彩娥氏：〔北京語で〕音楽には新しいものもありました。音楽家が作曲した曲を贈ってくれたり。コンクールのときはみな違う曲です。「牛郎織女」〔1953年台湾民族舞踊コンクールグランプリ〕とか。

〔日本語で〕とにかく台湾に帰ってきたから、やるべきものは歴史、歴史的なもの、それから民謡、みんなは知っている、私は知らない。そこから研究したわけ。今息子のいうことには、ママは人のしない苦勞をしたから認められたってわけ。

台北で活躍している孫〔台湾ロイヤルバレエ団芸術指導・洪康捷氏〕も民謡をアレンジして、昔の物を使わないで。舞踊もね、おばあちゃんのと違ってモダンです。独創的です。時代は違っても芸術に対する奮闘の精神はおばあちゃんと共鳴しています、と孫は云っています。

洪再利氏：私の兄と子ども〔洪仁威、洪康捷父子〕は、アメリカの要素をとりいれて民族舞踊を現代化しています。母はローカライズ、兄たちはインターナショナル化したのです。兄嫁のはアメリカ式舞踊です。母は中国の歴史を踊り、日本の舞踊を融合させて、台湾の創作舞踊を創り出しました。すでに経典となっています。クラシックとでもいうものですね。

母は難しい中国語が読めません。でも母は思考して、重要な点を把握することができのです。〔日本語で〕李彩娥さんのスタイル〕を創作できるのです。

李彩娥氏：ありがとうございます。

洪再利氏：母は、伝統的とか保守的なものではなく、独創的なものが好きなのです。

李彩娥氏：もっと勉強いたします。

補注⁴ あなたたちの人生の途上に「おばあちゃんの御惣菜」を三品のせて、味わって下さい。

(一) 真——人生は汽車のようなもので、駅ごとに景色が違い、「ただちに」精一杯力を尽くせば、その駅を過ぎてから心残りや迷いが残ることはありません。

(二) 善——私は舞踊は名誉や栄光のためだなどと思ったことはありません、つねに心の奥底の「情感」を解き放つ、これが私の舞踊の原動力です。

(三) 美——人生でもっとも振り返る価値のあるものは「過程」—努力の過程であって、「結果」ではありません。

「私たちが歴史を忘れたとしても、

歴史は決して私たちを置き去りにしません、

なぜなら私たちは毎日歴史を創造しているのですから。」

附録1 李彩娥をめぐる現役の舞踊家たち



「台湾民謡組曲」で孫の洪康捷氏（左）の恋人を踊る李彩娥氏。2008年12月26-28日、国家戯劇院。李彩娥氏提供。

洪仁威（長子） 舞踊家。高雄で舞踊教育に従事。

黄娟娟（長子の妻） 舞踊家。高雄で舞踊教育に従事。

洪丹桂（長女） 東京オリンピック（1964）、メキシコシティ・オリンピック（1968）の体操代表選手。「体操の女王」と称された。現在は体操指導者。

洪素香（二女） 屏東でバレエ学校主催。

洪素貞（三女） フロリダ在住、当地でバレエ教室主催。

洪康捷（孫） 台北芸術大学舞踊系修士。舞踊家。台北ロイヤルバレエ団芸術指導。

呉青吟（洪康捷氏の妻） ユタ大学舞踊研究所修士。舞踊家。台北ロイヤルバレエ団芸術監督。

洪若涵（孫） 中国文化大学舞踏学系卒。舞踊家。高雄で舞踊教育に従事。

蘇淑慧（呉青吟氏の母） 1960年代に谷桃子バレエ団で研修し、公演に参加。台北ロイヤルバレエ団団長／芸術指導。

附録2 李彩娥氏・略年表^x

祖先是福建省の出身。祖父の代には大地主であった。父・李明祥は東京に留学、続いて京都で獣医学を学ぶ。

1926年 父・李明祥と母・陳月蓮の長女として屏東で誕生。

屏東女子公学校で学ぶ。

1936年 台南へ引越し、台南市末広公学校に転校。

1938年 一家で渡日、新宿区下落合小学校に転校、卒業。

1939年 石井漠舞踊体育専科学校に学ぶ。

1941年 石井漠舞踊団とともに、大陸、ベトナムなど軍事慰問公演。

「太平洋行進曲」で、都新聞舞踊コンクール第一位。

1942年 「アニトラ」で都新聞舞踊コンクール第二位。

1943年 日本文化中央連盟主催、文部、厚生省、情報局公演第二回創作舞踊コンクール芸術舞踊の部一等「潮鳴り」（群舞）。

石井漠舞踊体育専科学校研究科卒業。



李彩娥舞踊芸術中心の前。
左から張蓮氏、河尻和也氏、楊韜、
李彩娥氏、星野。

- 1944年 屏東に戻り、当地で鉄鋼工場及び貿易会社を営んでいた洪調美氏（- 1987）と結婚。三男三女に恵まれる。
- 1954年 高雄市に李彩娥舞踊研究所を創設。
この年以降、高雄市教育局、屏東县政府等の主催で毎年舞踊発表会を開催。また赤十字、盲啞学校など福祉のための義捐金コンサートも盛んに開催。百レパートリー以上の新作創作舞踊、創作舞劇、民族舞踊の再編の他、コッペリア、くるみ割り人形、白鳥の湖などクラシックも上演。また舞台劇の舞踊演出にも参加。
- 1971-72年 石井漠記念舞踊団の招聘で、日本で3、4か月民族舞踊講習。
高雄市に李彩娥「創美教室」創設。
- 1982年 高雄市舞踊協会創設、以後6年間理事長を務める。
- 1991年 教育部から「中華民族芸術薪傳獎」受賞。
- 2000年 高雄市第19回文芸獎舞踊類・終身成就獎受賞。
- 2002年 石井漠没後40周年記念活動に参加。
- 2004年 中華民国舞踊学会が李彩娥、洪仁威両氏の舞踊教育における功績を「舞拓及薪傳——中華民国舞踊学会50年誌」に収録。行政院文建会は国立大東大学趙綺芳教授に委託し伝記『永遠的宝島明珠—李彩娥』（台湾舞踊館資深舞踊家叢書4）を出版。
- 2007年 アジア・ジュニア・ダンス・フェスティバル in 磐田に招聘され、日本の静岡県磐田市市民文化会館で公演。
- 2009年 高雄で開催された World Games 2009 開会式を演出し、大地の母を踊る。
- 2012年 中華民国舞踊学会より「終生貢獻賞」受賞。
日本、秋田県の石井漠没後50周年事業に招聘。

* ここには極く一部しか挙げなかったが、受賞、また李彩娥の名を掲げたダンス・フェスティバル等は枚挙に暇がない。

追記：本研究は、文部科学省科学研究費基盤研究（B）「戦時下中国の移動するメディア・プロパガンダ——身体・音・映像の動態的連関から」の一環である。

ⁱ 「満州藝文界彙報・演芸」欄、『満州藝文通信』第二巻第六号、康德〔満州国の元号。1934年が元年〕十年七月、59頁。

ⁱⁱ 村松道弥『私の舞踊史 ジャーナリストの回想 上巻』音楽新聞社1985、291頁。

ⁱⁱⁱ 2012年10月14-15日、秋田県能代市文化会館で石井漠没後50周年記念公演にて、李彩娥氏は舞踊

団を率いて出演し、記念フォーラムで講演した。(『北羽新報』、『秋田さきがけ』2012年10月14、15日、李彩娥舞踊中心提供)。

^{iv} 蔡培火(1889-1983)台湾の政治家。東京師範学校に留学、台湾議会設置請願運動を推進。日中戦争勃発後は上海に逃れたが、戦後は国民党に入党、台湾で重職に付いた。

^v 十和田湖の開発者として知られる和井内貞行の孫に当たる。和井内氏は同じ石井漠門下の大野弘史と結婚し、舞踊研究所を開いた。現在では、下田栄子(黒沢輝夫・下田栄子ダンス・スタジオ主宰、横浜)をはじめ、大野・和井内舞踊研究所出身の弟子たちが日本国内各地で舞踊研究所を持つ。

^{vi} 石井漠は1914年、強い照明で虹彩炎になったのをきっかけに、終戦前には殆ど失明した(緑川潤『舞踊家石井漠の生涯』無朋社2006)。

^{vii} 客船高千穂丸は1943年3月14日神戸から基隆へ向かったが、19日台湾沖で、敵方の潜水艦の魚雷攻撃を受けて沈没し、245名以上の犠牲者を出した。(「高千穂丸撃沈さる 去る十九日台湾沖で」1943年3月25日『朝日新聞』)

^{viii} 蔡瑞月 台南出身。石井漠門下から石井みどり舞踊団に移籍、帰台後は中華舞踏社を主宰し、台北を中心に現代舞踊家を育成した。

^{ix} 石井みどり(1913-2008)1929年より石井漠に師事、1935年に「石井みどり舞踊団」として独立した(石井みどり『よく生きるとは、よく動くこと』草思社2004)。現在は娘である舞踊家折田克子氏が「石井みどり・折田克子舞踊団」を主宰。

^x 「李彩娥大師大事紀」(李彩娥口述、楊玉姿編『飛舞人生 李彩娥大師口述歴史専書』高雄市文献委員会、2010)を参考に筆者作成。

補注¹ 東京日日・大阪毎日新聞社が海軍の後援で行った公募において1939年入選した軍歌。同年ビクターレコードより発売。

補注² 以下李彩娥氏の発言の前まで、李彩娥氏の希望で、『飛舞人生 李彩娥大師口述歴史専書』(李彩娥口述、楊玉姿編、高雄市文献委員会2010)53-54頁の抜粋を訳出して挿入。

補注³ 以下三見出し部分、李彩娥氏の希望により、李彩娥氏の文章を訳出し挿入。

補注⁴ 補注³に同じ。